ナウシカとオレ

She designated me as the artist.

「彼女に出会わなければ、オレは絵描きにすらならなかっただろう」

漫画版に登場するメカの中で大好きな重コルベットを描いてみました。それにしてもまんまギガントなデザインですね宮崎先生。

この世界の航空機は旧世紀（火の七日間の前？　それともエフタル時代？）のエンジンを使用しているということで燃料を必要としていないようですが、どういう仕組みなんでしょ？

大気をプラズマ化する熱核ジェットかと思いましたが、エアインテークもありませんし、なにより小型です。

左のイラストではワンモジュール化された核融合炉に少量の燃料を加熱させてプラズマジェットを発生させて推進力とし、胴体内のオイルポンプでひたすら熱交換。という解釈をしてみました。

このエンジンは放射能を発生しますが、この時代の人類は放射能に耐性を持っているのはご存じの通り。

トルメキア第三軍第一連隊
クシャナ専用重コルベット「アウドムラ」

トルメキア戦役開戦に合わせて建造されていた新造機。三皇子の重コルベットよりも一回り大きい。
クシャナ隊の腐海南下作戦決定後も兄殿下達の工作によりロールアウトが間に合わず、クシャナの王都凱旋までトラスのハンガーで眠ることになる。

「ナウシカ」を語るにはあまりにページが足りない。

そう、それまでアニメや漫画に人並みの興味しか持っていなかった11歳のイノセントボーイにとって、ソレはまさに青天の霹靂、センスオブワンダーの衝撃、アララト山の夜明けであると同時に、修羅の道への招待状でした。

「風の谷のナウシカ」（の地上波放送）

（あの「85年の夏休み」にCHOCOはナウシカを知らず、マクロスを観に行ってました）

腐海を突き破って飛び出してくる王虫、メーヴェで風に乗るナウシカを始めとするいままで見たこともなかった衝撃的なヴィジュアルの数々に圧倒され、感動し、録画したビデオをコマ送りでみまくり、アニメージュの購読を始め、初めてキャラ絵を描き、リベットメカを描きまくりました。そう、CHOCOは元々リベットメカ描きだったわけです。　それからはもうオタクへの道一直線。

ナウシカで感じたセンスオブワンダーの衝撃を他人にも与える、これが僕が絵描きの使命として感じることとなりました。

しかしながら漫画の方を読み始めてからは、その設定の深さにもっぱら漫画派に。

劇場版とは異なる腐海の真実なども興味深いところですが、一番の魅力はクシャナとナウシカの友情物語ですね。というか、クシャナを主役でもう一度映像化していただきたいと思うほど殿下が魅力的に描かれております。

漫画で好きな場所を挙げると、三巻のナウシカとクシャナのコルベット行軍、サパタでの騎馬戦（クシャナの「アハッ」）とそのラストでのカイの大往生シーン。

二人が全く違う信念を持ちながら不思議な絆に結ばれ、たびたびその進む道を交差させながら最期の地シュワにたどり着く物語は秀逸であります。

しかしながら終盤では衝撃的なヴィジュアル表現は失われ、ナウシカが一方的な宮崎駿の語り部になってしまったのは大変残念でありまして、できれば最後にクシャナとナウシカそれぞれの価値観で未来へのビジョンを語り交わしていただきたかった。（ラストのヴ王の立ち位置にクシャナがいた方がよかったのでは？

この漫画はコマ割、レイアウトの面から見ると大変独特なスタイルを採っています。

ほぼ均等な大きさのコマが一ページあたり10コマ近くも配置され、「ブチヌキ」等のコマ割を活用した演出はほとんど使われていません。その為五巻の重コルベット対ガンシップの戦闘シーンなどでは連載時から単行本への修正でコマごと切り張りして位置を入れ替えるという他の漫画ではマネのできない荒技を繰り出していますが、これらはやはりアニメ作家ということで、すべて映像作品の「絵コンテ」だと思って見返すと大変納得のいく絵作りになっていると気がつくはずです。

というわけで「ナウシカ」で絵描きの道へと誘われたCHOCOは漫画の原点もナウシカな訳で、自分で漫画を描くときもコマ割よりもコマ内でのカメラ位置の方を意識するようになってしまいました。

今回RAITAさんに原稿のお誘いを戴いたときも自分が描かないでどうするか！という勢いでスイッチが入ってしまいました。このような機会をありがとうございます～

リベットメカ描きの魂はまだ錆びちゃいなかったぜ！　描いていて楽しい～　コルベットは当然、ガンシップもメーヴェもソラで描けるぜひゃっほー

それにしてもナウシカは胸がでかいな～

（CHOCO）